小田地域に残る 米山の「書」

日尾八幡神社の神官であった三輪田米山は、県内各地の神社に、神社の名前を記した石文や幟などを残しました。内子町にも、小田・臼杵地区の三島神社に、米山が書いた神号額が伝えられています。

額の大きさは、縦192㌢、横98㌢、厚さ3㌢。ケヤキの一枚板に「郷社三島神社　田井神社　少教正米山書」と書かれています。

この神号額が書かれた正確な年月は不明ですが、同地区に住む中田治幸さんは、おじいさんの亀三郎さんから次のような話を聞いているそうです。

三島神社は、四国遍路43番札所明石寺（西予市）から、44番札所大宝寺（久万高原町）への通り道にあります。亀三郎さんは、そのすぐそばで宿を営んでおり、そこへ米山を招いたことがありました。そして米山がしばらく宿に滞在していた際に、数点の書を書いてもらったということです。

三島神社神号額

中田さんは、亀三郎さんの妻・カメさんが松山市久米町の出身だったことから、カメさんの実家が米山と親交があったのではないかと推測しています。また同地域には、亀三郎さんの所だけでなくほかの数軒の家にも、米山が滞在したという話が伝わっているそうです。

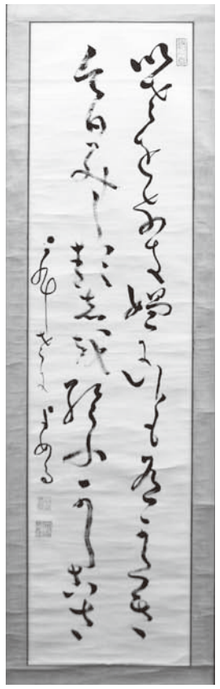
三島神社にある米山の神号額は、三輪田米山顕彰会の鑑定を受け、平成19年12月10日に内子町指定有形文化財に登録されました。

米山がこの地で書を書き残したということは、かつての人々が米山を大切に思い、もてなしたことの証。その先人たちの思いを受け継ぎ、今も、地域で大切に米山の書を守り伝えています。

三島神社　宮司
横田武敏さん

米山の神号額は、この地域ではよく知られていましたが、ほかではまだ十分認知されていなかったように思います。貴重な文化財も、納めているだけではもったいない。多くの人に見てもらい、価値を知ってもらうことが大切です。また、これをきっかけに、地域にも再び注目が集まることを期待しています。

内子町出身の書家たち


「いさをなき　媼にいとも　有かたき　今日みしるしや　給うかしこさ」

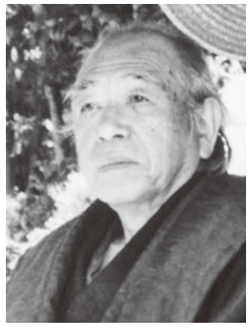
◉大高　小きん

1851（嘉永4）年、大洲市新谷生まれ。1870（明治3）年に内ノ子村の医師・大高美周に嫁ぎ、1937（昭和12）年に87歳の生涯を閉じるまで、内子に暮らしました。

宮中歌会始に優秀作品として歌が発表された小きんは、愛媛県の代表的女流歌人となり、その後、靖国神社に「夜雨」と題した和歌を献詠しています。

そのほか、小きんは「主婦の認識を高め子女の養育こそ主婦の最高の任務」と考え、1906（明治39）年、内子町に婦人会を設立し、初代会長を務めた人物でもあります。また託児所の創設にも活躍するなど、当時としては進歩的女性であったといわれています。

［出典：『新編　内子町誌』内子町誌編纂会編集　内子町　1995］



◉生口　日出男（万象）

1917（大正6）年、五城村福岡町（現在の護国区）生まれ。

小学校時代から書道に親しみ、家業の傍ら書道塾を開いていましたが、画家・芳我正之助の勧めで書家を志し、18歳のときに上京。書道教師の木俣曲水に指導を受けました。曲水の死後、1939（昭和14）年から賞勲局に勤め勲記を書いていました。

1942（同17）年ごろ日満支三国書道展で賞を受賞。翌年帰郷し、県展の審査員を務める傍ら、内子高等学校で書道を指導しました。1960（同35）年、肱南書学院を創設し、雑誌「習字の友」を創刊。1972（同47）年、脳血栓のため右半身不随となるものの、左手で修練し「左万象」として再起。1990（平成2）年に74歳で生涯を閉じるまで書き続け、県内外の書道の振興に大きな功績を残しています。

「林間の鶴　雲を帯びて還る」
（夕暮れの林の間を、鶴が雲間をぬいながらねぐらへと帰っていく）